活城土產

毎日新聞社
一橋文庫

一 本願寺家時代ニ於テ遊行流ト二家ヒ
名儀ヲ偏ニ浄土ノ本ト
一 俱舎ニ成実ニ
真ノ得果ヲ
生死ヲ
ト云ヨ
一 法相ニ唯識ノ有相

二見ヲ出テ中道ノ処ヲ
生死ヲ
三ツノ名ヲ
一 三論ニ八不ノ
離テ
ソノ
生死ヲ

一華嚴宗は三界唯心と立て法界圓融相即をあらわして生死をあかす實大乘宗なり而三乘一乘の法門を破す

一天台宗は一代の諸教を判じて藏通別圓の四教を立て生死をあかす實大乘宗なり而三乘一乘の法門を破す

一眞言宗又いわく法界の體性を立て生死本來涅槃なりと悟れば即身成佛と云々大日の三經を主の經とす

一真言宗又いわく法界の體性を立て生死本來涅槃なりと悟れば即身成佛と云々大日の三經を主の經とす

本不生の理をあらわす又有相無相二教を立て生死をあるなり有相の二教は下根の人勤のため無相の二教は上根の人勤のため皆實宗にあらず

一禅宗ハ仏祖ノ教ヲ別伝不立文字トシテ生死ヲ離ル、モ宗ヲ立テ即身非仏ト悟ニ入ルヲ以テ大事トシ自力ヲ以テ生死ヲ離ルヽヲ聖道門トシ

一浄土宗ハ弥陀ノ本願ノ名号ヲ称ヘテ凡夫ヨリ直ニ極楽ニ往生スルヲ以テ宗旨トシ単直大信果分不可説殊勝ノ入源門トシ

一真宗ハ浄土ノ教ヲ以テ本トシ弥陀ノ本願ヲ信ジ報土ニ往生シテ仏果ヲ得ルヲ以テ宗旨トス

抑モ三世諸仏化道ノ始終ヲ案ルニ浄土門ノ二ツハ中ヨリ聖道門ハ

けつまれん九家おなじく結集のとき家ふいりて
くほとけとなる人いと成佛せむといふる処
海雲門という極楽世界を指ず修行なり
是小二乗あり小乗の法門をつみて
真功徳をもりて極楽世界を指ず是れ菩薩の道
仏生とや指ずまた南无阿弥陀佛ぞ
極楽へまいるを指ず是れ菩薩の道
行とや指ず
そもそも家ふ九家小経文を引て
仏道修行成佛小極楽へまいり教ず
別儀という経文をきくべや
未徹そこでいくまず 釈迦てう二十八
代まぞい正法たでし 二十八代目へ
則達摩大師なり 此時小経文と二つ小

除(のぞ)き多(おお)くあるべきの事(こと)も皆(みな)この
是(これ)に収(おさ)まるなり
戒定恵(かいじょうえ)の三(さん)つを立(たて)るまでもなく
戒(かい)と恵(え)との二(ふた)つと立(たて)ても
更(さら)に禅定(ぜんじょう)の語(ご)も不要(ふよう)なるべし
たとえ人(ひと)のさぬん
の一つなりに利益(りやく)をまもるべし

禅宗(ぜんしゅう)の事(こと)をあげて三学(さんがく)を
論(ろん)ずるに恵(え)の一つに
もはや恵(え)は一法(いっぽう)小(ちい)さなる意(い)と
一心(いっしん)一事(いちじ)なるべきの
更(さら)に禅師(ぜんじ)なければまた
加(か)持(じ)祈禱(きとう)なんどの
多(おお)く必(かなら)ず十家(じっか)

暗證禪師　（こころくらきぜんじ）
誦文法師　（しょうもんのほうし）（さざんくをしょうして）
此の人の修行や一文字をおぼえたる事あれども
なる事あれども
中事なり

天台止観第五二曰（てんだいしかんだいごにいわく）

生死を免れん為に禅を学ぶ経文を
わしりそしりひるがえすぞこの
ものどもの心くらき人のいう
なり般若心経大唐日本共に
経文をかきわたるほどのありがたき
事なれども禅も釋迦如来
御法なり一文字も粗略

達摩大師四十八語二曰

弘願一称
（念佛の一聲いろ〳〵の行小
すべてとゝのふ）

万行宗致
此二字い何法の三ごと
もろ〳〵のごんとゝのふ

果号三字
衆徳根源

座禪工夫を廢して多く善根小
勝ると云ふ覚苑と佛なるとゝのふ

不借工夫
頓閑覺藏

こんの修行を廢して速小
まんどの小のぎとゝのふ

不蹈心地
速登霊臺

むねんむそうの念佛ざんまいとゝのふ

念迫無念
念佛三昧

生勝無生

往生浄土

是浄土門意佛を
あたまとする利

又戒定慧の三つとして戒行修事
定い禅観慧のごとく
則六波羅蜜の中六の
あり六波羅蜜成る
六つの内六つい修行なり
般若波羅蜜と仏智慧となり
な時い仏果菩提となり

なもろ仏法いなり
戒行修事
家の戒い南無阿弥陀仏
すもち布施戒と十善戒と三聚浄戒
まさくなり念仏
なをさで大戒ゟ禅ゟ
もけゟり修行いまりなく大戒

仏法の中小戒いまし
ずまもちて小戒
時に当て大戒者
ん等の戒急要なり
戒行を勤め比丘比丘尼
修行すべきことかくのごとし

大小乗のきわめてとかばかなり
問て曰経文小乗をさして指とるいて
老婆答て曰秋那迦佛
ありて（さるなまふ園覚
園覚経二曰
舎多羅教如標指月
修多羅とは経文のすなわち是天竺の云葉二

月と六字名号指すと釈文のごとき利
また月を人に指すごとくおよそ指すもの
彼人月を得て指を見ざるがごとく
なおつきをおよそ指すものも
見得ることあたわざるが如く我が一念も仏を
法界をも小一ますなりとおもうべからず
所なりとおもうべからず一念をもって
無量劫の罪を滅すること少しと思うべからず

其ごとく一念をさとりあさましき時を
悟道とも中称り是れ自力の修行にて
なすべきなり
又念仏も月なりとて妄念のすすめ
指のごとく念仏一声も
仏とならんなどと思うべき事なれ
ばかりにて極楽へいまいる事なれ

是小念佛中に極楽の
四種ありといへども一念
十念皆往生を得べし是これ
実体本願名号の
下智の死人通生
なりがたき
なりそれ小念佛の
あらそひ極楽
とそていふ浄土宗
といふすいいう
老僧こたへていふ大意
如是なり皆すべて浄土宗
小念佛のすゑなりといへども
悪人も名号を
するなり

中略り又念佛中ものいい悪を作りても苦なから
ぞとそんなして罪業をもおそるる事なく
悪人もなすかるといふ何條佛をたのんで
今生作り来の大悪をゆるしなまんとおもふ
佛ふさんけする時いろいろの大悪人なるも
念佛中ものいなすけるまでもいふまでも
法然よ人法語ふ念佛に一念も往生すると

一

答て少も罪を畏ると作る事なし
まる今時の庶まで罪業の
その最まての悪人なり和漢の
らいまものなり悪人ふなりて念佛
中せとすめるい他家のそ称なり
浄土宗のそんいちんのふそれ
ま少そそ後ふたすけ多まく

おもひて七小南学を阿弥陀仏を
やせを極楽へまいるなり
なるがんのみを申す
本願おほそ利まる
今日まて三界小うろへぬけぢなり
海をも栄華もも仏のおせをも
なるやかりなんを念仏小

あるといへども今も往生なりがたし一切せざる人小
阿弥陀仏小名南ゆへなるべし
称名念仏の安小能小を
名付てこれを頓証菩提の新小結をもって
能人をなりいふ小いまんや本願名号を
聞へ受こもしや

さまたげ給はんと立たまふといへども
佛ふすまでまして阿彌陀佛のてだてを
立てたまふ給ふ小せんとまうしたまふ末代今日の
ごとくなる時十劫正覚の
願成就もさまたげ給ふ小能もうしたまふ
ゆゑに是もうそ妄語ぜんもの
今時のひとたん生死の名号少そいる

同でいうく大衆ふいいづもも一箱うち箱小
入といふ浄土宗も大衆ふうち箱小
うち箱うち無箱小入すゆゑ是を
相違ゆゑいうく
老婆等皆同まう無箱とはふい法界一切の
ものうち一切いのうちもうち色もなくそ
ゐうもその性空なりのゆゑたとへ松を

見そくれと見ところ飛ぶようにそくさ
りのなり毛すのもちろくそく
ねと見るりのなり是仏性ありる衲ふい
わゆる全相の性なりひる相ようお性はも
全法ふかのようところと悟りいみなり仏刈
仏性なれるも衲方のよのさ色のさみ
そのふそがうごみようさみきろりて迷てり

ひさみのものとろうひのみるるを仏
みず年そうたまふそのものみふすまち
聖道門浄土門の仏刈なり全相の性刈い
自力ふてのけることを聖道門浄土門い
其つとりのをあさなが極楽ふ(ひきのま
たまよゆふ大願強力なり若号なりこまを
浄土門といなり自力ふていえ一仏は

無相のものと能もって
出でんと修行せん者
有相も有相ももって
ずして唯仏力の法縁
あいもって称揚
らまって如来
取りこまするものなり
出でんと修行せん者
有相ももって
のおのおの浄土と帰
等根の二生
そなえて
ありて
ありて
悪なり実に有相
一相ずつ相いすもの
出でんと修行せん者
有相ももって
のおのおの浄土と帰
等根の二生
そなえて
ありて
ありて
悪なり実に有相
一相ずつ相いすもの

さまざまの有相の名号と一念なる実相
の無相の名号との大通のうへにたて多
名号なり其名号すなはち実相なり
海五も実相なりまた因も果も本
実相のさまざまの有相の名号すべて
南無の浄土と當来の浄土や其
しもじもやいかんこのやうなれ

むぢなひ等覚の菩薩もひとへにおよばず
ゆゑなり論佛ふかくも不可思儀の名号と
此浄土をあらはし経文ふかく
あらはれり報通佛にやうごうを
芬陀利華と名たまふ芬陀利華ハ
蓮華のなり蓮華ハ蓮華の苑と実と一度に
なり給ふ佛果のうへの名号右に同も亦

果と果の南をの経仏なり有相今く
今相なり又今相と
仏菩薩なとと
てもんたらのごとく二十の絶力
のちもんい話かかそもも普遍師
ひとりけかいと立なまと大乗後我かて
法悉よ人ひろくまたり若時か論家

ろくく多仏かを
今無十除人の名師ちなりそまとう
当事而年なり今い日本国中か廣く
称よるいなうでる元りのう有相のちゃ
より今相のごくらくかいちんれ
ゆなり是ろう勧のそもおしいぶまで
の法の中ゆもあるべうんとお京かて

文殊普賢
菩薩
行者の
中もあろう
そうそう
往生
浄土
成佛
善導
人師
ばかり
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
南無阿弥陀佛
今
私の
諸の
なもあみだぶつ

経文(きょうもん)をも見(み)ざりし海士(あま)なども仏(ほとけ)なり
せちがらんなり往生(おうじょう)も成仏(じょうぶつ)とても
なにひとりのことやは
極楽(ごくらく)をうち捨(す)てまいるし
捨(す)てぬ往生(おうじょう)ともなり
生(い)ぜまほしくも悟(さと)りきる
なき人も父母(ちちはは)うけし国身(くにみ)ながら
て仏(ほとけ)なるらん今(いま)世(よ)小一方人(こひとかた)の中(なか)なる人も

なき人(ひと)も父母(ちちはは)うけし国身(くにみ)ながら
て仏(ほとけ)なるらん今(いま)世(よ)小一方人(こひとかた)の中(なか)なる人も
悟(さと)りきる人(ひと)も一方(ひとかた)にこそ
ありとのたまふ父母(ちちはは)うけし国身(くにみ)ながら
仏(ほとけ)なるらん今(いま)世(よ)小一方人(こひとかた)の中(なか)なる人も
極楽(ごくらく)往生(おうじょう)といふも
成仏(じょうぶつ)の福(ふく)なり
ゆえつはる名(な)なるさのこせんさくする
おどろのするそいなり

二字終ニ小字ニ成ル
法華經藥王菩薩本地品二曰
若有女人聞是經典如說修行於此
命終即往生安樂世界阿弥陀佛大
菩薩衆圍遶住処生蓮華中宝座
之上
此經文の如く女人法華經を修行して
死ば

見くらべ給ふべし

往生二字

華厳経　宝積経　法鼓経

四域経　産禅経　法華経

十往生経

なおもものたらざるかくのごとし

そもそも右件の諸経あまねくこれを披閲するに

しんによじっそう

真如実相と名づけ

一体と称し実相いぜんのごとくなり

悉のごとく称しまた別体なるが

故にいう

幸福こと尽くこれ仏法に属すと

一説法の時十方世界小塵
まちてあつまるときく芥
一念の帰命なり又小念
がてしあつまるをやべし先志願
の開小為
あり其風の縁
そのゆへん和合して志如

水にうつる浪をたゝく風のようなるもの
あそびなみをあるきまわるごとくうごき
首尾二つありて同形のさまざまなる
ゆびなるゆえに首尾一体なるゆえ一方法
ばかりにて首尾の柿の井より花いでたる
首しもごんぜうの

いるしゅみそうこれを三界と通ずる
なまりうたくみ
者偏えて三界といえる欲界色界無
色界小六天をいえども三界のうちなり
欲界小六天をいえる下二の地利天
下二の他化自在天なり六欲天とてもすべ

三つ共ちんのふなり
食欲二小い睡眠欲なり
もや好うろくのふの根なり

六天の次第

下二四王天忉利天
四方中間の利
四方のあるじの四王天也
南い増長天王東い持国天王
南い増長天王北い毘沙門天王之

右四天王彼四天王
住して此界をて
見ゆる所なり其眷属の天人なり
なり又三界の人
雑類の世界なりて
男女のかたちも人
そのなり異報
生二忉利天一なり善悪もまた
やはり三界
あるべき帝釈天なり異報善悪
一だにあり此天の四
合て二八二千二天なり
なり此中の天と
しなる男女のかた

男女のむつびあひて
いんとするをりから山賊
果報力のおとろふるこの
なりけるの間陣か張勒面しまゐ
蒼猩をもつてまた
をいのちけんの関陣即陣
功いま果して俘虜
平定化平定いま果ら平管由旬
ちうちうもあらいまだ一まだになり男女の
おもてをいたひ小兒
をもいざまもおまもお
うる〳〵会ハ
ひざのうへ小児
平癒のうまもまた

果報のなり
や。他化自在天(たけじざいてん)は、六万由旬(ゆじゅん)
とかや。魔王(まおう)なり。外(ほか)六天(ろくてん)の
主(あるじ)なり。果報(かほう)勝(すぐ)れ、
つきざるもろ〳〵の魔王(まおう)
ども、すべて、男女(なんにょ)のくるしき間(あい)
を、ことごとくすぐれたるあそび
をなすといえども、婬(いん)をもって
なるゆえ、佛(ほとけ)となるべからず。

なるゆえ、ことごとく一念(ねん)を我(が)小(ちい)さく立(たて)て、
するゆえ、魔王(まおう)となり、
大慈悲(だいじひ)ふかくして、一切(さいしょ)衆生(しゅじょう)
ごとくなるゆえ、佛(ほとけ)となり、佛(ほとけ)
も魔王(まおう)も一念(ねん)いかんにある。
のごとくにして、大小(だいしょう)遠近(えんきん)
諸(もろ〳〵)の衆生(しゅじょう)、魔王(まおう)の眷属(けんぞく)と

果(くわ)して佛道(ぶつだう)修行(しゅぎやう)して三界(さんがい)を出(いで)
淨土(じやうど)へまいりの人(ひと)魔王(まわう)の
佛法(ぶつぽう)かさまたげをなすのゆへ人(にん)の本(もと)
ゐも佛法(ぶつぽう)をきゝふかく
人(ひと)修行(しゅぎやう)ざるものなりて
六欲天(ろくよくてん)と生(しやう)ずるのてんといふ果(くわ)
報(ほう)生(しやう)ざるなり又三惡道(あくだう)へ
なり六欲天(ろくよくてん)ゐ
一ぬの身(み)の死(し)もせ二ゐ
まきの下(した)汗(あせ)ぞ
ゐ小(ちい)家(いへ)
みすいそや
此人間(にんげん)界(かい)も六欲天(ろくよくてん)の
とやうなり

色界天合て十七天あり
その名を果報善生と
もうす果報いとすぐれ
勝のかずかずのもの
なく清浄あつまりて宮殿荘厳も
またぐものなき色界の中の勝れ
果報つくるもとく三業の勝
色界の中の天人の
如く色界を出ず
辺天ともうす識無辺天
小乗の無所有処天
天人いろもの色界天
ほとんどして四色界の果報をうけなり

右之蘊の内色蘊一つのみにて神通なり

五蘊ハ欲界ニも天色界ニも天無色界ニも天合て

色　二十七天の内色を二界六通ともなりいづれも

受　天人の果報カなきゆゑ神通くもなし

想　ゆゑ但し仏界のうち

行　聖衆と縁覚と菩薩とハ

識　なり外天人ともそなくゆゑ

内色蘊一つのうてハんなり

ゆゑ得果をうけつ天人も又げらく小舌

てそこがいへもの一つをよくふみて修行すまを

行ずるものといふなり

又ハ果小須弥山といふ山ハ

八万由旬なり此山ハ

千逮南い南閻浮提　天竺

日本

西い西牛貨洲　東い東弗

于逮南い南閻浮提　天竺

日本

西い西牛貨洲　東い東弗

婆提　北い北倶盧洲

の四大洲ハ此山の

四方にあり

小鑑軍功と号を須弥四列となり
けるの今もい東い北い方百年七百年もわい
千里なり南い北の界なり一切衆生の代
百十七年未法の世ぶい今も末代よ代の代
もい今い量も中ぶり人のたけい千八寸よ
もり次第くにち末代の世ぶを
人のなけき今も今も世い人の今ぶそ

七千二百余人なり一時ぶ
右ぶ仏の門ぶ南西ぶ一浦佛おなまふ
始り二千一百年おなまふすなり一万
栗と西ぶ一万八千仏法のさたなりなり
小のち小い世ぶ仏法のぶ法いすぶ
末法ぶ一万年ぶ仏法のぶ法いすぶ
天竺大唐日本なり

又須弥山の半腹より
のいとでき
二つい須弥山を地とし
ますこうこの二十七天
地として天人すこぶる
天より下界その須弥山
人ら畜生餓鬼地獄
ありておのおのの世界の利益も合て
一つの須弥山世界とやなりかくのごと
のごとき三千世界の中に石像の須弥
山世界ありり月日星も石像ありり廣き
空辺のごとく仏界もかくのごとく小
千大千世界と仏菩薩会量空辺
なり人らの世ごとに

佛法のはなしいひろまるこのてうかるがいなしと
きくにつけ
まつ一日王子天の面に日星まします
をてらしたまふがごとく天人たちのめぐみ
日星にすぎ
身の光明をてらしなやめる悪い天人の
果報力なりけり人も人の命なかの時も
なりそのときに人もこころまどひたる
ゆゑに光明のひろまりいでざるなり
きるれども人のこんごうぶつかいほさつて
人の命といふ方ざいふ色ありて時にたがはず
般若かものをそうするゆゑに二つのあな
いぞこそけれ大ぶつの事

けごまるそのとき婬欲はげしくして
おとるるなりまたふ二果六道のがんのごとく
むとりそいめつしまそうてはげまり
ちの梅のとくかなくして甘こととなし
この如く苦悩三界とやすき安全の令
ちまりてかすとはげむの六方の
時かもやくの白毫光世界もくく

やこととなりけとるかはげむて日月をゆるこなふ
刹那の間なり是佛の大悲をもつて二ぞう
をはらしてそくしなまふ人の令
十方の時くもや悪世界少てもうくのさいえん
もとりて経文もこうるくあり浄土経をあつい若時のうち
浄土経をあつい若時のうち百佛少て極楽
よりたまふ刹虚空小声ありて善佛

すべからく是をかいとうの導師として
娑婆世尊薬王菩薩なり十七の眷属仏也
皆悉く是の経を受持すべきものいうまでも
なく乃至一念も随喜せん極めて
まいらせ大経ふところ
釈迦如来大慈悲
ごとくの法をひろめ
まして供養

其後生を得ていて佛となり神通を
現じて十方世界を化のまふなり

そもそもいまく善導大師は
法然上人の勢至菩薩の化身なり
しかこと事あや

善導こそこていまく二祖のすいかを記せ
るなり善導大師は大唐長安城にて滅
去時ころ前まりて滅壺にいぐ取りて具足

滅不可免の文なり其文ハ

末法出現名善導

則是彌陀化身也

濁世末代導悪人

一切衆生易往生

皆悉ク滅スベキ文ナリ彼翁モ童

ヲモソダテテ師トスル事ハ此ホト

ナラヒナキ事ナレドモ智者ヲバ

シテ浄土ノ六代目ノ道綽禅師ノ弟子

トシテ念仏往生ノ義ヲ今ノ如ク相續

シテ別日ヲ法然ト人ニナヅケラレ

善導ノ化身ト云ヒ大唐ニ於テ

天武天皇の時の
三韓仏記に見えたり此等の僧列の
人皇四十代天武天皇の代大寶九年登用
御誕生なり入滅は唐の高宗皇帝の代
永隆二年辛巳三月十四日御年六十九
歳なり

辛酉歳南山悟真寺を建立利益名
悟真光明善導大師浄業大和尚位

法然上人の中国并朝の御門
国の法文に添間名号時国公法名

西光居士

母の養氏法名

妙海禅尼

御誕生の人王七十五代　崇徳院の御代

長承二年癸丑四月七日午刻なり

上人九才の時国公父子勧学得業そ
十五才にて出家し天台宗の名僧すること仰ぐ所なり
その中にも文学の志深く
叡山西塔北谷の功徳院の源光房の弟子となりて
あか間十六年のとき師の

京都の修道のおとりおこなひて九条殿
関白公の御感に合ひまつりて児を馬おくり
まうけまつれども不ㇾ受。東殿御車をそへて児おくり
とどけまつるに、かくのごとくなまふことをいふ児あり。
たふとき礼義をしれる事、唐国の人にも
あらじと感じ、いよいよ尊み給ふ。其の児の
あるじと作りまたりそのの
名を源空と改たまふ十五歳十二月なり
その春、源空を随ひたまふ十八歳の時、
父君不ㇾ幸まします。
○ちこのちうたまふときい二月の十九日の夜ふけ

後堀河の御時、貞応元年の六月の十九日の夜ふけ
なる人、同じ班荊里園の五
六人、西塔小坂禅房源光のもとに
のりて西塔小坂禅房源光のもとに
なる源光のいふ、「我が背子ぞ
な人、同じ班荊里園の五
六人、西塔小坂禅房源光のもとに
のりて西塔小坂禅房源光のもとに
なる源光のいふ、「我が背子ぞ
なる人、同じ班荊里園の五
六人、西塔小坂禅房源光のもとに
のりて西塔小坂禅房源光のもとに
なる源光のいふ、「我が背子ぞ
なる人、同じ班荊里園の五
六人、西塔小坂禅房源光のもとに
のりて西塔小坂禅房源光のもとに
なる源光のいふ、「我が背子ぞ
なる人、同じ班荊里園の五
六人、西塔小坂禅房源光のもとに
のりて西塔小坂禅房源光のもとに
なる源光のいふ、「我が背子ぞ

いんぜんをもよおしてそのまま臨終あるべし
臨終黒雲慈眼房寂室の窓に入てすまと
かやうの事前かの沙門ありてすまち法か
ほ十年まて満方の名帰なちかいなとして
そまてその妻孥をさりそのうへ一切経
を三遍まて写奉ふ事なかき導の御書を
三遍合て八遍すり其時の文をつけまたなふ

一心専念弥陀名号
行住座卧不問時節
久近念々不捨者是
名正定之業須彼仏
願故

右の文ふみをもて聖しょう道どう門もんを捨すて浄じょう土ど門もんに帰きし給たまふ。

一ひと年とせ隔へだてて建けん久きゅう二ふた年とせ乙きのとの亥いの年とし始はじめて浄じょう家けとなりて

大おおよそ横よこ曳ひき車ぐるまを許ゆるさず

一日ついたち夜よ十二時じ

門もん弟でし三百余人のせきぐくたち参まいる。

同人にん九人は法然の古ふるき大だい恩おん主しゅなり。

建けん久きゅう二ふた年とせ丙ひのえ午うま八月

選せん択じゃく集しゅう建けん久きゅう九年の年小九条

関かん白ぱく兼かね実ざね公こう

此この事ことを聞きいて法然の古ふるき朋ほう友ゆう

なる故ゆえ摂せっ津つの国くにへ流るせんとて

建けん久きゅう十一ねんの春はるの頃ころ

ことにより二ふた月つきの関かん白ぱく

又また人ひと流るさるゝことなり

兼かね実ざね公こう丁ひのとの

此この時じ八十六代土御門の御世なり

同年冬十二月八日小津尾勝尾寺に於て
去る後建暦元年辛未十一月十七日小勝尾寺に
和俊なりて同廿日小京人師の月二年冒
頭のごとく法名文字なり記念
の為に此事なり一日廿三日小賀茂の
大明神貴女となりて御見舞その時小
明神のいろくとちやう人法性寺もちうし

浄土宗の念佛の大意
ゆづりなり又人ごとに
云ふ選擇集の物語
なり念佛なくして
ゆくべき念仏の安心
ならびに
平生のいのりと作つまた小
いろく選擇集の無智者のこゝろえなり猶ゞく
尼入道の玄智の
叶時御覧候浄書大(同)廿四日

作(2)而自書或令人書添生福等の行(3)
あるてなきものをおもいて
法然本地身
大勢至菩薩
爲度衆生故
顯置此道場
此勢至菩薩と同く文と生福る歟
又楞嚴經二十五圓通勢至菩薩之文曰
我本因地　以念佛心
入無生忍　今於此界
攝念佛人　皈於淨土
又案東山新黒谷人一教記法文の禅家
の一佛和尚自書ものそうな

(2) 作
(3) 行

傳聞法然活如来
蓮華上ニ品安座
教智者如尼入道
一牧起請寂善哉
仍添状毎年恩賜
やわあるべき

人の出仕記いなぐ
ぎかり書付ける
又ある人の申ける
まうのうみありて
人いかほどの国司の名源内武者定明とや人ありける
かの時の国司どもいかほどをそいうくもなくなる
ちなる人いかさきのまことにあらて三日にて
死ぬたり連まるさうざかり九十ばかりて父の
かる死をそうなるみる
のその涙ぬかよ人ぬ
やさうしてこるうぐるぬ入
くなり

三人大師と称したまふ
人王百十四代 御門勅宣として
国光大師とおくりなしたまふ

勅使の須弥壇上
上﨟 松本殿 中御門大納言宗顕
辨 日野殿 左少辨輝光
勅使 侍従殿 少納言宣通朝臣

右勅使ハ元禄十年丁丑正月十八日
智恩院門主二代白栄上人秀道大和尚
任特旨別開山御忌之時なり奈良の
東寺油小路を錯て二十又日まで
開基芸百遍浄苑院の二七年も大
法事なり但し

勅使いな

勅書

勅王法與佛法比等内外貴典章
朝家同釈家定律都鄙仰興盛浄
土開宗源空上人先究聖道之教
后關浄土之宗誥孫陀誓願之胸
次感善導提撕於定中覩宝樹照
妙境内證益明歩金蓮現霊光密
因恩露即是肉身如来何疑勢至
権跡三朝帝師徳重于當時四海
良導行應于未代皇化廣布率土
法要永傳普天特諡號圓光大師

元録十年丁丑正月十八日

一 法興七人御出生ましまし元禄十六年癸未まで
百九十二年

一 善導大師御往生ましまし元禄十六年癸未まで
千二十二年

一 釋迦佛御入滅ましまし元禄十六年癸未まで
二千二百七十二年御入滅の時ふかい天神
地祇あまねくあつまりたまふ日本ふ

人王いなりましまし神代也
天照皇大神宮ふきあはせずの尊の御代なり佛御入滅
鸕鷀葺不合尊の御代なり後ふ日なの人王いはまり
なり岩代九年ふの人王ふはまり神の子
なりみぎうなやふ神武天皇ふ人王ふ一の皇
なり神武天皇ふ御代也
なり以帝ふ元禄十六年まで二百

六年程まで大唐小い王名人王
国の文代目穆王帝と中代の時な大唐い
さかく
王帝かまゆつかまのをまりかな
とゆふ日本とふかまよかまり叶穆王
よりまゆも二年代も日本も帝王なり
唐い国ひろきゆふの七師門とかりとも
も叶なり日本も神代のろい伝と万巻となり

前の板いうるとゆふ
あるふ二ゆまふい仏法の事成をこと
まり和歌いうるけなまりてそろく
笑方かるまふを念仏のいかるまふ
そこそこそこ花もいとも
おろのなしさだあて文字のかやまり
かなづろいなどひ

元禄十七年